

## 第二百五十一話 本格的緒戦に狼狽か、バタビア沖海戦

緒戦は、彼我双方にとって難しいものである。その難しさを感じさせる海戦がある。ジャワ攻略に任ずる今村陸軍中将指揮の陸軍第16軍(輸送船56隻)を護衛する第三護衛隊(第5水雷戦隊司令官原頭三郎少将指揮)、《第7戦隊(栗田健男少将)》と連合軍ABDA艦隊との艦隊決戦であるバタビア沖海戦である。



### 1 海戦の概要

ABDA艦隊の一部艦艇は揚陸中の輸送船団を攻撃した。逐次に戦闘加入した水雷戦隊の各艦艇は、ABDA艦隊に対して攻撃を開始した。彼我艦隊の戦闘は、1942/2/28深夜から3月1日未明にかけて行われ、第一次から第4次、46時間に及んだ。日本の損害は、駆逐艦小破3に対し、連合軍艦隊は重巡洋艦1、軽巡洋艦1、駆逐艦1沈没、警備艇複数隻沈没であった。

### 2 本海戦の評価

#### (1) ABDA艦隊の戦力発揮不全

オーストラリア (Australia) ・イギリス (British) ・オランダ (Dutch) ・アメリカ合衆国 (America) の各海軍艦艇を集めて結成され、オランダ領東インドの防衛にあたった。この連合艦隊が十分に戦力発揮できなかった要因は次のように考えられる。

- ・ 各国の海軍艦艇同士の連携、特にオランダ海軍艦艇と他の三ヶ国の情報交換等で齟齬を生じた。共通の言語が設定されていなかった？事前の連携訓練不足？
- ・ 圧倒的に優勢な日本海軍に対する敢闘精神を称賛する史家も居る。
- ・ 幸いにも、連合艦隊の技量も日本軍以下であった。

#### (2) 日本艦隊の問題点

##### A 第三護衛隊司令官と第七戦隊の戦場における戦略目標論争

海戦に先立つ2月27日、「連合軍艦隊が輸送船団に接近中」と報告を受けた、連合軍艦隊との決戦をのぞむ第三護衛隊と、敵艦隊と距離をとろうとする栗田少将は、一日近く電文の応酬をくりひろげた。第三護衛隊と第七戦隊のやりとりを受け、みかねた連合艦隊司令部は『バタビヤ方面ノ敵情ニ鑑ミ第七戦隊司令官当該方面ノ諸部隊ヲ統一指揮スルヲ適当ト認ム』と発令した。が、爾後栗田艦隊は反転北上、戦闘には一部を除き参加しなかった。

##### B 遠距離砲戦に終始し、敵艦艇撃滅に長時間を要す

圧倒的に優勢な戦力を有しながらも、遠距離砲戦に終始し、極めて低い命中率(2%強)だった。大角度の避弾運動も、低命中率に拍車をかけた。

##### C 友軍相撃 日本艦隊が発射した魚雷により日本輸送船団が被害を受けている。陸軍は海軍の責任を不問に付した。また、秘密兵器“酸素魚雷”の信頼性が失われた。

(B,C項に関して、宇垣纏連合艦隊参謀長の戦藻録に辛口の評価あり)

##### D 捕虜の取り扱いが区々

各艦艇は、敵兵救助に当たったが、捕虜としての扱いは各艦で異なっていたという。駆逐艦「雷」の敵兵救助・取扱については、メモランダム189話参照

##### E 実戦と訓練の差異認識不足や実戦経験欠如の弊

近距離からの雷撃を受けたにも関わらず駆逐艦部隊の存在に気付かなかつたり、敵艦隊を味方艦隊と誤認したり、戦果に見惚れて敵艦艇を取り逃すなどの不手際が続出

\*斯くほどに、日本海海戦以来37年ぶりの本格的な海戦に、指揮官以下が狼狽しているように思える。緒戦は難しい。我が自衛隊はどうであろうか？訓練と同じように整齐と戦えるのか？

(了)